

スペイン植民地都市マニラ・ビノンドの 中国人とカトリック信仰

菅谷成子

はじめに

フィリピン共和国首都圏マニラ市のビノンド地区は、パシグ川を挟んでスペイン時代の「マニラ市」、すなわち、城壁に囲まれた「イントラムロス」の対岸に位置する。ビノンドは、スペインの植民地支配下で、特に19世紀中葉以降、商業や金融が急速に発展し、かつてフィリピン随一の近代的で洗練された都会として、また経済の中心地として栄えた¹⁾。

現代のビノンドは、第二次世界大戦以前の都会の面影を残しつつ、より庶民的な雰囲気のある商業地区である。なかでも、ビノンドを特徴づけるのは、スペイン時代に淵源をもつチャイナタウンの存在であり、総人口の80パーセント以上がカトリック教徒であるフィリピンにおいて、周囲とは異質な雰囲気の空間を形成している。

その一方、歴史的に見ると、ビノンドは、1987年に列聖されたフィリピン最初のカトリック聖人、ロレンソ・ルイスを産み出した地でもあった。聖ロレンソは、中国人の父親と現地のタガログ人の母親との間に生まれた中国系メスティーソ（混血人）で、1637年に、キリシタン禁教下の長崎、西坂刑場で処刑された日本殉教者の一人である²⁾。さらに、ビノンドは、やはり中国系メスティーソで、「イエズス会女子信心会（ベアテリオ；Beaterio de la Compañía de Jesús、1684年設立、現在の処女マリア修道会 [the Congregation of the Religious of the Virgin Mary, RVM]）」を組織したイグナシア・デル・エスピリトゥ・サント（1663-1748年）を出した地でもある。マザー・イグナシアは、熱心なカトリック信徒であったが、当時の各派修道会が土着の諸島住民を正式の会員として受け入れなかったことを背景に、イエズス会士の協力をえてフィリピン独自の女子修道会の基礎を築いたのである³⁾。

この両者が、いずれも中国系メスティーソでビノンド出身であったことは、フィリピンにおけるカトリック信仰の発展とビノンド、中国人およびその混血の子孫とのかかわりを象徴的に示しているといえよう。

本稿では、故郷の福建からマニラに渡ってきた中国人のなかに、スペイン植民地統治下でカトリシズムを受容して、マニラで婚姻し、その子孫を遺した者が少なからずいたことに着目し、特に、これら中国人カトリック教徒とビノンドとのかかわりを概観する。

1. スペインの植民地統治と中国人

スペインの植民地統治は、カトリシズムの普及を支配の正統性原理とするものであった。それゆえ、植民地の住民は、斉しくカトリシズムを受容することが求められた。すなわち、「新発見の土地（インディアス）」の住民がカトリシズムに帰依することは、住民の意志はどうあれ、スペイン国王——ローマ教皇の權威の世俗世界における代理——の支配に服することに同意したとみなされたのである。

それゆえ、1565年に初代総督レガスピがセブに根拠地をおくと同時に、同行したアウグスティノ会の修道士が諸島住民にカトリシズムを受容させるべく活動を開始したのである。その後、1571年に、恒久的な植民

地首府としてマニラ市が設置され、スペインによる植民地支配が本格化した。それに伴って、1578年にマニラ司教区の設立が決定され、1581年、初代マニラ司教として、ドミニコ会のドミンゴ・サラサールが着任した。その後、1595年にマニラ司教区は大司教区に昇格し、その下に、マニラ司教区および新たにヌエバ・セゴビア、ヌエバ・カセレス、セブの3司教区が設置され、植民地における教会制度が整えられていった。

この間、スペイン領フィリピン諸島においてカトリシズムの布教と住民の司牧を担ったのは、主として、各派修道会であった。すなわち、1578年にフランシスコ会が来往し、81年にはイエズス会が活動を開始した。続いて、1587年にはドミニコ会が来島し、さらに1606年、レコレクト会の到来をもって初期の布教・司牧を担った主要な修道会が揃った⁴⁾。

一方、スペイン領フィリピンは、マニラ・ガレオン貿易の開始によって、太平洋を隔てたメキシコのアカプルコと結ばれることになった。その結果、中国・福建より、毎年の季節風に乗って、多数の中国帆船が定期的にマニラに来航し、アカプルコへの輸出品として大量の生糸、絹織物、陶磁器などをもたらすようになった。来島する中国人も急速に増大し、17世紀初頭には、貿易シーズン中にマニラに滞在する中国人の数は2万人に上り、スペイン人植民者の数をはるかに凌駕した。マニラは、当時の中国帆船の東南アジア各寄港地のなかで最大級の中国人人口を擁する港市に発展していた⁵⁾。

スペイン植民地政府は、これらの中国人を「潜在的脅威」とみなすようになり、彼らに対する管理の強化と徴税の実を挙げるため、中国人指定居住区かつ商業中心であった「パリアン」を隔離・収容施設として利用した⁶⁾。その一方、特に中国人移民すなわち定住者に対しては、カトリシズムへの改宗による現地社会への同化をはかった。中国人移民のカトリック改宗は、スペインの植民地支配の正統性原理という観点からも積極的に取り組まれねばならない課題であった。

2. ドミニコ会の中国人布教

先述の各派修道会のなかで、特に中国人の改宗・司牧を担当したのがドミニコ会であった。ドミニコ会の宣教師は、来島するや直ちに中国布教への可能性に期待をいただきつつ、その試金石として、マニラの中国人の改宗に取り組んだ。その当時、中国人は、「パリアン」に居住した貿易商人や職人などのほかに、バシグ川右岸のバイバイ（サン・ニコラス地区）と呼ばれた地域を中心に、各種の職人、農業や漁業に従事する者などが居住しており、その一部は現地女性と結婚して定住していた。これは、スペインのマニラ到来以前に、バシグ川右岸地域（トンド）を支配していた首長ラカンドーラが、来往する中国人商人の居留地として、すでにバイバイを割り当てていたことと関係があると思われる。

ドミニコ会は、来島の翌年、1588年に最初の布教所、施療施設を備えた教会・司祭館をパリアンに隣接して設立し、中国人布教を開始した。続いて、1589年には、バイバイの中国人のために「清めの聖母（Nuestra Señora de Purificación）」教会・司祭館が完成した。このため、最初の布教所は、1599年にピノンドに開設された中国人専用のサン・ガブリエル病院に吸収され、その機能は発展的に受け継がれた。サン・ガブリエル病院は、1618年に完成したパリアン教会（Inglesia de los Santos Reyes del Parian）と合わせて、ドミニコ会の中国人布教の拠点となった。また、この間、改宗事業のために、言語（福建語）や価値体系の研究がなされたが、中国人の協力をえて、木版漢字印刷による『弁正教真伝実録（*Apología de la Verdadera Religión*）』（1593年）や『カトリック要理（*Doctrina Christiana*）』（1605年?）が出版された。その後、サン・ガブリエル病院は、1774年に病院としては閉鎖された。しかし、その礼拝堂は、18世紀末葉に破壊されたパリアン教会にかわって、「パリアン教区」教会としての機能を受け継ぎ、1847年にパリアン教区が廃止されるまで、その機能を果たした。

この間、カトリックに改宗した中国人は、パリアンではなく、バイバイに居住させる方針が採られたため、バイバイは、次第にカトリック教徒中国人とその家族の居住地に変容していった。その一方、改宗者が増えるに従って、バイバイの人口も過密になり、中国人改宗者とその家族のための新たな居住地が必要とされるようになった⁷⁾。そのような折、1593年、テルナテ島攻略を目指したマルク遠征の途次、ゴメス・ペレス・ダスマリニャス総督が座上艦であったガレー船の中国人漕手に殺害されるという事件が起きた⁸⁾。

3. 中国人居住地としてのビノンド

ダスマリニャス総督が中国人漕手によって殺害されたことは、スペイン人に衝撃をもたらし、「中国人の脅威」を現実のものとした。その結果、全ての在住中国人は追放されることになった。しかし、ゴメス・ペレスの息子で、臨時総督に任じられたルイス・ペレス・ダスマリニャスは、植民地経済において、中国人が果たしてきた役割を十分に認識していた。1594年、ルイス・ペレスは、スペイン人より、ビノンドの土地を購入して、追放を免れた少数の在住中国人商人や職人に与えた。彼らは、土地に対する永久の権利とともに、ある程度の自治が認められた。それとともに、ドミニコ会はビノンドの司牧を担当することになり、ビノンド教会・司祭館を設立した。新たな中国人改宗者は、手狭になったバイバイに代わって、ビノンドに居住することとされた⁹⁾。その結果、ビノンドは、ほどなく中国人改宗者とその妻子からなるコミュニティとなり、さらに、これらの子孫である中国系メスティーソが卓越する地となった¹⁰⁾。

モルガの『フィリピン諸島誌』によれば、16世紀末葉から17世紀初頭において、ビノンドには約500-600人の中国人とその家族が居住していた¹¹⁾。その後、バイバイでの布教・司牧をめぐる、ドミニコ会は、トンド地域全般（バイバイはトンドの一部）の布教を担当していたアウグスティノ会と対立することになった。その結果、1614年、ドミニコ会はバイバイより撤退し、それに伴って、その地の中国人カトリック教徒もビノンドに移ることになった。

一方、ビノンドには、次第にインディオとよばれた土着の諸島住民が居住するようになった。そのため、これらのインディオと土地に対する権利をめぐる紛争になることがあったが、ビノンドの中国人居住地としての起源に遡って、通常、中国人居住者側に有利な裁定が下された。また、1686年には非カトリック教徒中国人居住者は、本来の居住者とされる中国人カトリック教徒からなる自治組織（中国人グレミオ；Gremio de Chinos de Binondo、正式に設立されたのは1687年、中国系メスティーソもその一員であった）に、地代を支払うこととされた¹²⁾。このように、ビノンドは、中国人、中国系メスティーソ、インディオが居住する地となったが、中国人カトリック教徒と中国系メスティーソが本来の居住者として優遇される特異な地であった。

4. ビノンドの中国系メスティーソ

ビノンドは、16世紀末よりドミニコ会の司牧の下で、カトリック教徒中国人とその家族、子孫の居住地として独特の発展を遂げた。彼らは1603年や1639年などの中国人蜂起・虐殺事件に際して、蜂起した中国人に与せず、むしろ、スペインによる鎮圧に協力するなどして、一般に「パリアン」を中心とする非カトリック教徒とは一線を画していた。そのなかで、ビノンドの中国系メスティーソは世代を重ねるうちに、次第に中国人カトリック教徒とは別のアイデンティティを獲得することになり、1741年には、中国人のグレミオから袂を分かって、独自のグレミオ（Gremio de Mestizos de Binondo）を組織した。その後、1840年代以降、ビノンドには、スペインの中国人政策の変更により、多数の非カトリック教徒が居住するようになった。そ

のなかで、特に上層の中国系メスティーソは、中国人社会に対抗しつつ、ピノンドの経済活動を担って富裕化するとともに、カトリシズムに根ざしたスペイン的生活様式を積極的に取り入れ、それを体現し、スペイン的教養を誇りにするようになった¹²⁾。

それゆえ、ピノンド教会は、中国人カトリック教徒、中国系メスティーソおよびインディオ住民の3者を信仰によって結びつける場でもあったが、同時に、これら3者が信仰をめぐる対抗する場でもあった。たとえば、ピノンド教会での席次は、主祭壇に向かって左側からメスティーソの頭領（ゴベルナドールシリョ）、次に中国人頭領が着席し、右側にインディオ（ナチュラルレス）頭領が陣取り、メスティーソに上座が割り当てられていた¹³⁾。この3者の教会をめぐる対抗関係は、特にピノンドの祭礼において、尖鋭化することがあった。

ピノンドの守護聖人は「ロザリオの聖母」であり、1612年に中国人彫像師により作られた聖像が現在まで伝えられている。1646年、マニラ湾周辺は、圧倒的な海軍力を誇るオランダ艦隊の攻撃にさらされたが、無事に撃退することができた。この当時、人びとは、この「ロザリオの聖母」の加護によってオランダが敗退したと信じた。これを記念して、この「ロザリオの聖母」像は「ラ・ナバル；La Naval」と呼ばれるようになり、毎年10月第3日曜日が祭日として祝われるようになった。「ラ・ナバル」の祝祭は、また商売繁昌に繋がるとされ、19世紀には、一般の中国人も参加する、マニラ近郊で最も盛大で壮麗な祭礼となった¹⁴⁾。

長年、「ラ・ナバル」の祭礼の運営にあたって最大の財政的負担を行っていたのは、中国系メスティーソのグレミオであったため、祝祭にまつわる行事において上座が与えられていた。ところが、1887年の「ラ・ナバル」の祝祭にあたって、当時のテレロ総督は、ナチュラルレスのグレミオに祭礼における上座を与え、次席に中国系メスティーソ、最後に中国人カトリック教徒をおいた。これに抗議して、中国系メスティーソと中国人カトリック教徒の両グレミオは祭礼への参加を取り止めた。祭礼は、結局、財源不足のため、最終日のナチュラルレスのグレミオが財政負担した行事のみがろうじて行われる結果となった。さらに、このことは、中国系メスティーソおよび中国人カトリック教徒の側を支持したとして、マニラ大司教の嘆願を無視して、テレロ総督がピノンド教会の主任司祭、ドミニコ会のホセ・エビア・カンボマネスを罷免する結果をもたらした¹⁵⁾。

ここでは、この事件の背後にあったものを詳しく分析する余裕はないが、ピノンドという当時の植民地経済の中心地において、中国系メスティーソが経済力を握っていたことが示され、スペイン支配の根幹をなした教会の維持、運営も彼らの財力なしでは立ちゆかなかったことを示している¹⁶⁾。

終わりに — 中国人とカトリック信仰

スペイン領フィリピンにおける中国人移民社会では、18世紀中葉から19世紀前葉の時期を除いて、カトリック教徒は常に少数派であり、中国人の改宗は遅々として進まなかった。しかし、300年以上にわたるスペイン植民地支配下で、様々な時期に様々な事情で、カトリシズムを受容した中国人は少なくなかった。ここでは、初期の中国人のカトリック改宗にまつわる奇蹟譚と、「ラ・ナバル」の他に中国人に関連の深い聖母マリア像を紹介したい。

初期の中国人のカトリック受容についての奇蹟譚は、バイバイ（サン・ニコラス地区）を司牧したアウグスティノ会との関係でも伝わっている。カトリック改宗を拒否した中国人がある日パシグ川下流をバンカ（小舟）で航行している際、ワニに身をやつした悪魔がバンカを転覆させて、中国人を溺死させ地獄に落そうとした。しかし、たまたま、教会の前であったため、アウグスティノ会の聖ニコラスを呼び出したところ、ワニは岩に変わった。それにより、中国人は改宗した。聖ニコラスは、実際に霊験あらたかな中国人の守護

聖人として、多くの崇敬を集めた。

サン・ニコラス地区については、現在、ビノンド教会に安置されている「ロンゴスのキリスト像」にまつわる奇蹟譚もある。この像は、ロンゴスと呼ばれた場所の古井戸で、耳の不自由な中国人によって発見されたといわれる。この中国人は、その霊験で聴力を回復し話せるようになった。この像は、当初、サン・ガブリエル病院の礼拝堂におかれていたが、1863年の地震後、ビノンド教会に遷された。現在もこの像は特に中国系住民の信仰を集めている（今日まで、その発見場所とされる古井戸が保存されている）。これらは、中国人の改宗がバイバイ（サン・ニコラス地区）に始まったことを反映すると同時に、中国人布教をめぐってアウグスティノ会とドミニコ会の対抗関係があったことを示唆していると思われる¹⁷⁾。

「ラ・ナバル」の他に中国人とかかわりの深い聖母として、現在、ビノンド教会に安置されている「迅速なお助けの聖母（Nuestra Señora de Pronto Socorroあるいは、イナ・ナン・ビグラン・アワ；Ina ng Biblang Awa）」がある。この聖母は、中国人の手になると思われる縦20センチメートル、横15センチメートルの聖画像で、上述したドミニコ会が1588年に設置した最初の中国人のための布教所におかれていた。その後、サン・ガブリエル病院の開設とともにその礼拝堂に移転された。1863年の地震で、礼拝堂が破壊されたのを機会にビノンド教会に安置されるようになった。この聖母に祈ればすぐに願いがかなうとして、熱心に崇敬され、「迅速なお助けの聖母」と呼ばれるが、図像的には、やはり「ロザリオの聖母」である。その祭日は、毎月第2土曜日であるが、11月第2土曜日にはビノンドおよびパリアンで聖像行列が行われる¹⁸⁾。

さらに、バタンガス州タアルには、多くの巡礼を集める「カイササイの聖母；Nuestra Señora de Caysasay」が祀られている。この聖母の霊験は、ラグーナ州カランバの中国人農業労働者の蜂起に端を発した1639年の中国人蜂起・虐殺事件に遡る。これは、フィリピン史上、最悪の中国人蜂起・虐殺事件で、2万人以上の中国人が犠牲になったものである。この事件の折、敬虔なカトリック教徒で、この聖母が祀られている教会の造営に関わった石工ファン・インピンは無実であったにもかかわらず、叛徒の一人と目されて住民に海辺に連行され、めった斬りにされ殺害された。しかし、聖母に導かれて、インピンの遺骸は合一され、4つの傷痕を遺して、家に帰ることができたと伝えられている¹⁹⁾。この奇蹟譚の背後にあるものについて、筆者には詳しく検討する余裕はないが、カトリック信仰を称揚する他に、少なくとも植民地のカトリック信仰を支える教会の維持に中国人の技術が必要されていたこと、この時期までには、カトリック信仰の有無を問わず中国人が各地に定住するようになっていたが、地元の住民との間に親和関係ばかりでなく、何らかの緊張関係も生じていたことを反映していると思われる。

本稿では、主として、中国人のカトリック信仰とビノンドとの関係をドミニコ会の中国人布教を軸に見てきた。中国人のカトリック改宗がスペイン植民地社会で生きるための方便であったとしても、結果として、カトリシズムを自らの宗教としていった中国系メスティーソを産み出したことは否定できない。またビノンドがその中心であり、中国人、インディオ、メスティーソが信仰により結びつく地であるとともに、これらとの間の緊張関係をも惹起したという環境が聖ロレンソ・ルイスやマザー・イグナシアを産み出すことに貢献したと思われる。

註

- 1) スペイン領マニラについては、寺見元恵「19世紀のマニラ」齋藤照子編『東南アジア世界の再編』（岩波講座東南アジア史5）、2001年、321-348頁所収；ラモン・マリア・サラゴサ『マニラ 都市の歴史』学芸出版社、1996年；および菅谷成子「スペイン植民都市マニラの形成と発展」中西徹・小玉徹・新津晃一編『アジアの大都市4 マニラ』日本評論社、2001年、21-47頁所収を参照のこと。ビノンドについては、初めての纏まった業績として、Lorelei D. C. de Viana, *Three Centuries of Binondo Architecture*

- 1594-1898: *A Socio-Historical Perspective* (Manila: University of Santo Tomas Publishing House, 2001) がある。
- 2) ロセンソ・ルイスについては、Fidel Villarroel, *Lorenzo de Manila: The Protomartyr of the Philippines and His Companions* (Manila: UST Press, 1988) を参照のこと。なお、フィリピン史上における中国系メスティーソの重要性を初めて学問的に指摘したのは、Edger Wickberg, "The Chinese Mestizo in Philippine History," *Journal of Southeast Asian History* 5 (March 1964): 62-100 である。また、idem, *The Chinese in Philippine Life, 1850-1898* (New Haven, Conn.: Yale University Press, 1965; rept.ed., Manila: Ateneo de Manila University Press, 2000) を参照のこと。
- 3) イグナシア・デル・エスピリトゥ・サントゥおよび RVM の起源については、Marcelino A. Foronda, Jr., *Mother Ignacia and Her Beaterio* (Makati: St. Paul Publications, 1975) を参照のこと。また、マザー・イグナシアの組織したベアテリオを含め、スペイン植民地下での女子修道会などの活動およびその問題点については、Luciano P. R. Santiago, "The Development of the Religious Congregations for Women in the Philippines During the Spanish Period (1565-1898)," 『上智アジア学』第12号、1994年、49-71頁を参照のこと。
- 4) Pablo Fernández, *History of the Church in the Philippines (1521-1898)* (Metro Manila: National Bookstore, 1979), pp. 19-35, 98-115.
- 5) 菅谷成子「スペイン領フィリピンの成立」石井米雄編『東南アジア近世の成立』（岩波講座東南アジア史3）、2001年、126-131頁。
- 6) パリアンは、ゴンサロ・ロンキリョ・デ・ペニャローサ総督の下で、1581-82年の貿易オフシーズン、「冬」に設置された。当初、パリアンは「マニラ市」の一郭に設けられていたが、1593年のダスマリニャス総督殺害事件の後、治安維持の観点から、「マニラ市（イントラムロス）」の東側の水濠を隔てた地区に遷され、その後、18世紀末葉に取り壊されるまで、概ねその位置にあった。なお、「パリアン」は、当初、中国人の隔離・収容施設としてより、中国貿易と徴税の便宜から設置されたため、零細な職人、行商人、農民や漁民などは「パリアン」に住むことを強制されなかった。しかし、ダスマリニャス総督殺害事件以降、パリアンは、治安維持のため、非改宗中国人すなわち異教徒中国人、あるいは単身の中国人を隔離・収容する施設としての機能が強調されるようになり、また、その目的で設置されたと記述されるようになった（箭内健次「マニラの所謂パリアンに就いて」『台北帝国大学文政学部史学科研究年報』5（1938）：1-158；およびAlberto Santamaria, "The Parian (El Parian de los sangleyes)," in *The Chinese in the Philippines*, 2 vols., ed. by Alfonso Felix, Jr. (Manila: Solidaridad Publishing House, 1966-69), vol. 1: 1570-1770, pp. 67-118 を参照のこと)。
- 7) 菅谷成子「18世紀後期フィリピンにおけるサン・ガブリエル病院——非キリスト教徒中国人との追放との関連において——」『名古屋女子大学紀要』人文・社会編37号、26-27、30-31頁；De Viana, *op.cit.*, pp. 14-15. また、ドミニコ会による木版印刷については、Juan Cobo, *Pien Chen-Chiao Chen-Chu'an Shi-Lu: Apología de la Verdadera Religión*, ed. by Fidel Villarroel (Manila: UST Press, 1986), pp. 47-93 を参照のこと。また、ドミニコ会の中国人布教について、簡便に纏まったものには、Pablo Fernández, "The Apostolate of the Dominicans among the Chinese in the Philippines," *Boletín Eclesiástico de Filipinas* 39 (1965): 182-88 がある。また、Susan L. Pe, "The Dominican Ministry among the Chinese in the Parian, Baybay and Binondo: 1587-1637," M.A. thesis, Ateneo de Manila University, 1983 の業績などがある。
- 8) 事件の詳細については、中国側の史料として『東西洋考』巻5「東洋列国考 呂宋」がある。

- 9) なお、ビノンドに隣接するサンタ・クルスでは、その始源は確定されていないが、1619-34年頃には、イエズス会が指導するカトリック改宗中国人が居住していた。この地は、18世紀半ばまでには、人口構成において、中国系メスティーソ住民がインディオ住民と相半ばする地区となっていた (Santa Cruz, Archives of Archdiocesan of Manila; and Wickberg, *Chinese in Philippine Life*, pp. 18-20)。なお、これに関する日本人の先駆的な業績として、箭内健次「マニラトンド区の支那人の発展」『南亜細亜学報』2 (1944): 35-64がある。
- 10) ビノンドは、ドミニコ会のマニラ到来とともに設立されたアジアにおける布教管区名、その守護聖人である「ロザリオの聖母」にちなんで、プエブロ・デル・ロザリオとも呼ばれた。
- 11) 神吉敬三、箭内健次訳 (大航海時代叢書Ⅶ)、岩波書店、1966年、404-407頁。
- 12) 菅谷「サン・ガブリエル病院」、28頁；および Wickberg, *Chinese in Philippine Life*, pp. 19, 31-36, 137-139. なお、19世紀後期のフィリピン諸島においては、15万から30万人の中国系メスティーソがおり、全人口の約6パーセントを占めていたと推定される (Wickberg, "Chinese Mestizos")。
- 13) de Viana, *op.cit.*, p. 34.
- 14) *Ibid.*, pp. 40-41; Nick M. Joaquin, ed., *Mary in the Philippines* (Manila: Luz Mendoza Santos, 1982), pp. 20-21; and *idem*, *The Philippine Rites of Mary* (Manila: Luz Mendoza Santos, 1982), pp. 83-84.
- 15) "Caso de Binondo 1888 contra el Padre Jose Heria," Libros 115, Archivo del Universidad de Santo Tomás; de Viana, *op.cit.*, pp. 72-73; and Wickberg, *Chinese in Philippine Life*, pp.138-139. ビノンドでの「ラ・ナバル」の祭礼は、アメリカ時代初期まで続いたとされる (de Viana, *op.cit.*, p.40)。また「ラ・ナバル」あるいは「ロザリオの聖母」は、現在もフィリピン各地において特に上層知識階層の人びとの崇敬が厚いが、それは、その子弟がマニラで教育を受けた際、当時の高等教育機関であったレトラン学院やサント・トマス大学で学び、「ラ・ナバル」に親しんだ伝統があるからだと考えられている。
- アメリカ植民地時代、「ラ・ナバル」像は、イントラムロスの聖ドミニコ教会に安置されていたが、日本のマニラ占領中、1942年4月26日に聖ドミニコ教会から郊外のサンパロク地区のサント・トマス大学の礼拝堂に移された。戦後、再び「ラ・ナバル」像は、1954年10月10日、ケソン市に再興された聖ドミニコ教会に移転した。現在、「ラ・ナバル」は、10月第2日曜日を祭日として、ケソン市の聖ドミニコ教会の一角で盛大に祝われている (Gallardo Asor Bombase, Jr., *Santisimo Rosario Parish: Its History and Guide for Parish Leaders* (Manila: Santisimo Rosario Parish, 1990) を参照のこと)。
- また、各地においても「ラ・ナバル」あるいは「ロザリオの聖母」の祭礼が行われているが、特にタガログ地域とオランダとの戦いに兵員を提供したパンパンガ州のバコオルやアンヘレスなどで盛んである (Joaquin, *Philippine Rites*, pp. 83-86)。
- 16) この背後には、フィリピン革命の勃発を1896年に控えた、植民地社会における様々な問題がからんでいたと考えられる。たとえば、世俗と教会の権力の間には対立があったこと、植民地の住民に修道会による教会の支配に対する反発があったこと、植民地経済を握っていた中国系メスティーソおよび中国人に対するナチュラルレスの不満の蓄積があったことなどが考えられる。
- 17) de Viana, *op.cit.*, pp. 36-37.
- 18) *Ibid.*, p. 37; and Joaquin, *Philippine Rites*, p. 87.
- 19) Quijano de Manila, "Signs and Wonders," *ibid.*, p. 120.